

## ベナレス ガ ア ラ ナ シ VARANASI

母なる河ガンジスに抱かれ、3000年の歴史をもつヒンドゥー教最大の聖地。人口およそ100万人。河岸にある沐浴場（ガート）は一般に開放されており、信者と観光客で賑わっている。

エレナ、目を閉じるとき

この界限は、野良牛よりも野良犬が目立った。あばら骨が浮きあがった老犬や、目の動きがおかしい狂犬病の犬、人の流れを避けながら交尾する犬もいる。

野良犬がゴミに頭を突っ込んで残飯を漁る場所で、人間もゴミを漁っていた。歳は十八くらい、見とれるほど美しい女だった。女は動物のように腰を曲げて、ゴミの中の米を拾うと、すぐ口に入れた。だが、もう僕はそんな光景にも、おどろかなくなっていた。カルチャーショックは品切れなのか、それともすでに好奇心が麻痺してしまったのか。

胸にぽっかり風穴が開いているときは、通りすぎる人のすべてが運命の人じゃないかと思うものだ。

こちらに歩いてくる人が、僕とすれちかう瞬間に、ニツコリ微笑んでこないだろうか……。信号待ちで横に並んだ他人たちが、突然手を取り合つて歩き出さないだろうか……。

日本にいた頃の僕は、そんなことばかり考えていたように思う。そして、きつと何か良いことがあると思つてやってきたインドでも、結局は同じことを考えていた。

僕は今日もまた、ミネラルウォーターのボトルを人形のように抱きながらゴミの道を歩いている。物乞いの子どもや野良牛に行く手をはばまれ、内臓がはみ出たヤギの死体をさけて歩くうち、川沿いの火葬場に迷いこんだ。

火葬場の高台では、死体にたきぎを乗せて火をつけている。いちばん奥の

死体がよく燃えていた。目の前の景色が、炎の熱でゆれている。僕は頭が痛くなつてしゃがみ込んだ。足元にあつた死体をあやうく踏むところだった。死体は布に被われていたが、薄い布からは顔の輪郭がくつきり浮かびあがっていた。彫刻のような顔立ちが、若い女性を想像させた。

火葬場からはなれて、ガンジス河へいった。ふと河面を見れば、さつそく死体が浮かんでいた。少年の死体だった。死体らしくそれなりに腐っている。うつぶせだから、どんな死に顔かわからない。少年の死体は河の流れに逆らうことなく、ゆつくりと回転しながら下流に消えていった。

ヒンドゥー教最大の聖地、生と死が一体となつたベナレスは不思議と居心地が良いと言う旅行者も多かつたけれど、僕にはここが死臭の街でしかなかった。ガンジス河の死体を見ると、我ながら何の感情もなく死体を眺めている自分が不気味で、ひよつとして何も感じないのは、自分もこの死

体と同じようなものだからか、現在の僕とこの死体にどれだけのちがいが  
あるというのか、もしや遠くないつか、自分もこの河面で浮かんでいる  
のではないか……、考えるのはこんなことばかりだ。もちろん、そう考え  
る理由は、自分でもわかっている。ある意味で僕は、呼ばれてこの街にき  
たのかもしれない。

デリーからマトウラー、アーグラ、アラハバードへ、三週間かけてベ  
ナレスに流れ着いた。

悪徳タクシーや日本人狙いの詐欺、偽両替屋、この三週間でガイドブツ  
クに書いてあるほとんどのトラブルは体験した。

そして三日前、寺院をスケッチしていたとき、あまりの暑さから腰にま  
いていた貴重品袋を外してしまい、帰りのチケットと所持金のほとんどを

盗ぬすまれた。

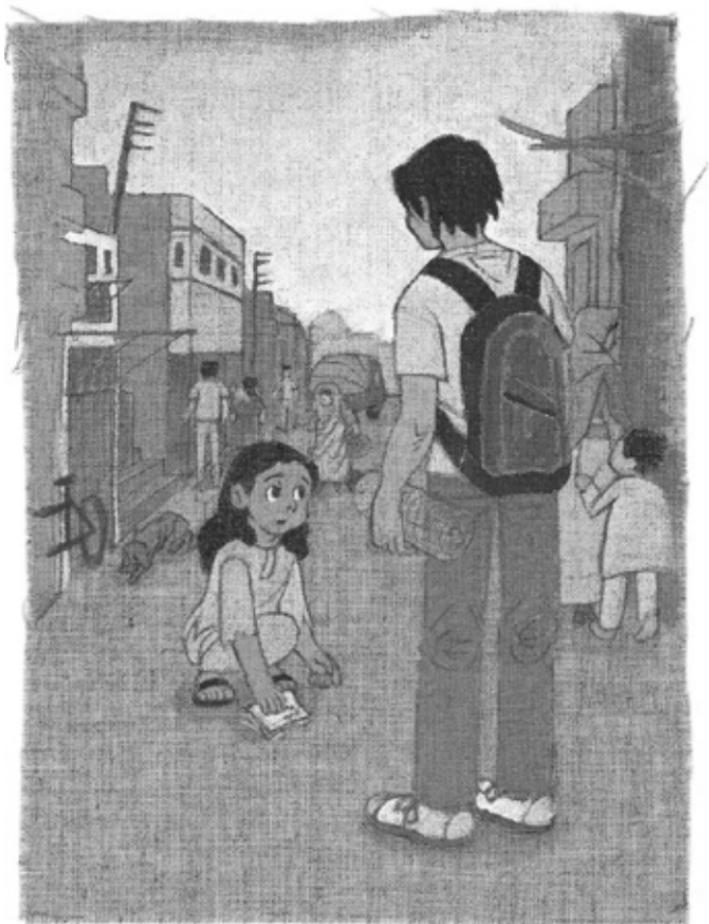
これでは日本に帰れない。今夜ホテルに泊とまる金もない。その時は精いっぱいうろたえたが、幸いペナレスは觀光地かんこうちで日本人はたくさんいる。僕は日本人に金をたかろうと腹をくくり、毎日、沐浴場ゆたくじょうやホテルの前で黄色人種をさがしては、泣きそうな顔をつくって助けを求めた。相手は貧乏旅行者びんぼうりょこしやばかりだったが、誰もがこれほど墮おちた日本人がいたのかという目で僕を見ては、それなりの金を恵めぐんでくれた。意外いがいと簡単に金が貯たまった。こころよく百ドル札をくれる者だっていた。この調子なら、帰りの飛行機代もすぐだろう。ピザは十分残のこっている。ここでのんびり金を貯ためてすす方が楽だ。そうして僕は、今日も日本人をさがし歩あいていた。いつものように物乞ものこいの子どもがよってくる。この前まではコインを投なげてやる余裕よゆうもあったが、今ではわずらわしくて仕方がない。

ドブの中から這い上がってきたような汚い少女だった。この日、追いはらっても追いはらっても、しつこく寄ってくる子どもがいた。

「お前にやる金なんかない、ったく！」

思わず日本語でボヤキ強く追いはらったが、それでもついてくる。いいかげん腹が立って殴りかかろうとしたとき、少女は何かを僕の足元に置いた。それは一ルピー札の束だった。身ぶり手ぶりで懸命に、「これをあなたにあげる」と伝えてくる。なぜ僕に金をくれようとするのか、理解できなかった。僕に襲われるとも思ったからか。いや、そういえばこの少女には見覚えがある。

いつもこの辺にいる物乞いの子だ。この子は、毎日僕が何をしているのか知っていたのだらう。だから、僕にわずかばかりの金をくれようというのだ。



僕は啞然あぜんとした。

どうして物乞ものこいまでする子どもが、いくら困っているとはいえ、見ず知らずの外国人に金を渡わたすことができるのだろうか。それも、ただの金じゃない。ざっと百ルピー、日本円にしたら千円にもならない、それでも何日かあるいは何週間も苦勞して稼かせいだなけなしの金だろう。それを捨すてようとするなんて、いったいどんな心境しんきやうなのか。僕はその少女とまともに向かい合つたまま、ずっとそんなことを考えていた。

夜になり、寢床ねどこに入つても、僕はやはりそのことを考えていた。深夜一時を過ぎてても眠れずに、何度も寢返ねがえりを打ちながら、あの少女のこだけを考えていた。

そもそも僕がこんなところに来たのは、何かの偶然か、夕子の悪い冗談だった。僕は自分がインドへ行くなんて考えたこともなかった。

冬には雪に閉じ込められる北陸の山村に、僕は生まれた。クマが出るような救いのない田舎だった。

僕はいつも何かを思いつめて、独り言ばかりブツブツ唱えている不気味な子どもだった。考えることは一つしかなかった。自分がこんな田舎に生まれたのは何かの間違いだ、ここには何も面白いことがない、何でも話せる友だちもない、僕に合うものは何もない……。だから僕は、食事中でも歩き

なからでも地図帳ちずちようを広げては、自分が生まれるはずだったところをさがし、いつでも都会へ行けるように東京や大阪の地名を暗記あんきして、地下鉄の乗り方を頭の中でイメージしたり、方言が出ないように誰とも話さないようにした。当然、友だちなんかいなかった。でも、そんなことはどうでもよく、僕はいつも、この田舎いなかから逃げ出す作戦さくせんをねっていた。とにかく僕はトラックの荷台にだいに忍び込んで、村がダムに沈んでも、外国のスパイにさらわれともいいから、ここを出て、見たこともない新しい世界へ行きたかった。夢も希望もなかったけれど、ここを出てから初めて自分の生活が始まるのだと思っていた。

高校の卒業式の翌日、一番大きいバックに着替えを詰めて、一日三本のバスに乗り、特急列車に乗りかえ、とうとう僕は田舎いなかを抜け出した。東京の郊外こうがいにアパートを見つけてから、両親には予備校よびこうに通うというウソを電

話で伝えた。

三カ月の間、僕の部屋に電化製品でんかせいひんは一つもなかったし、友だちも知り合  
いもいなかった。バイトを二つ三つかけもちして牛のように働いたが、別  
に金がほしかったわけじゃない。他にすることがなかっただけだ。

休日の楽しみは、一応あった。近所に美術大学びじゅつだいがくがあつて、その学生食堂  
で昼飯を食べているうちに、ニセ学生をしてデッサンを描かいたりしていた。  
でも、キャンパスの人だからの中でひとりぼっちでいると、世界で一人き  
りになったような気持ちになった。

いつしか僕は、他の人間たちが、空や雲と同じ背景はいけいのひとつに見えてきた。  
もつとも、他の人間は、僕に対して同じことを思うかもしれない。

そう……、そうだった。僕はようやく気付いていた。

街なんて人が多いだけだ。田舎いなかにいても都会みなかにいても、何を見ても楽し

いことがない。そもそも僕は感じる心を持っていない、そんなことにやつと気付いたのだった。だが、気付いたからといって何も変わらない。相変わらず単調な生活がつづくだけだ。

しかし、救いというのはどんな者にも降りてくるらしい。移り住んだ街にただ一つ、僕のカケラほどの好奇心を刺激してくるものがあつた。

住宅地の真ん中にある「柳川観光社」という小さな旅行社、アルバイトの行き帰りにいつも通りかかっていた。二階は家族の住居で、一階が一人きりのスタッフの事務所だつた。ツアーの広告や航空会社のポスターなど貼つてあるが、こんなところで、しかも一人で、何の仕事をしているのか、僕にはまったく想像できなかつた。

事務所には、強面の老男がじつとデスクに構えており、夜の十一時をすぎても蛍光灯ひとつで仕事していた。机から体が生えているみたいに、い

つも座っている。男の頭はてっぺんまでハゲ上がっているが、モミアゲだけは無意味にフサフサと生えていた。僕はこの男を勝手に「モミアゲオヤジ」と名付けた。

毎日、柳川観光社の前を自転車を通ったが、くたくたになつて帰る夜でも、ここを通るときだけはなぜかゆつくりペダルを漕いでいた。それはなぜか自分でも不思議だったが、たいしたことでもないと考えないようにしていた。それが、初めて冬を迎えようとする頃、やつとその訳がわかった。

入口に貼つてあるポスターだ。褐色肌の美しい女性が僕を見ていた。思えば、このときの僕は写真と目が合うなんて錯覚を、まともに信じていた。

写真の女性は金や銀で着飾つて、込みいった模様の民族衣装をまといながら、そんなものがかすむほどに美しい女性だった。人を見つめるためだけに存在しているような目と、この世のすべてを知り尽くしたとでもい

いたげな不敵な笑み、人間の魅力を越えた美貌だと思った。写真の女性はその目と笑みでもって、毎夜、疲れて帰る僕を見ていたのだ。

僕は、おどろいた。僕は初めて人を想った。たとえ写真であろうと、僕が女性に対して、おそらくは人に対して、こんな感情を持ったのは初めてだった。これが、僕に徹底して欠けていたものだった。僕は、どこの国かも知らない写真の女性によって、人となろうとしていた。

それが、ひと月ほどたったある夜、季節が冬から春に変わるように、柳川観光社のポスターは、フラメンコをするスペイン女にかわっていた。いつかはこうなるとわかってはいたが、僕は自転車を漕ぐ足をとめ、茫然とした。事務所の中では、相変わらずモミアゲオヤジがしずかに仕事している。

僕は半ば無意識のうちにドアを開け、事務所の中に入っていた。もう深

夜一時を過ぎていた。

「何？」

モミアゲオヤジは突然、僕のような者が入ってきたというのに冷静だった。僕を見ようともせず、仕事の手もとめない。

「おい、何だっけ聞いてるんだが？」

「あつ、その、表に貼<sup>は</sup>つてあつたポスターなんですけど……」

「これか？」

モミアゲオヤジの真うしろに、あの女性がいた。

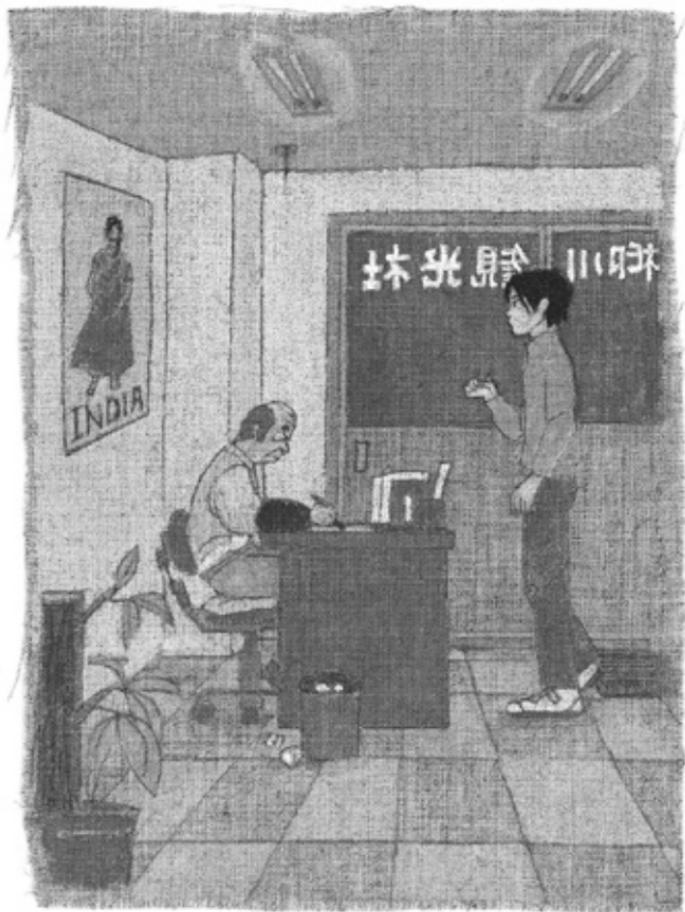
「あの、これは……」

「このサリーの女が、どうした？」

「はあ、サリーというんですか？」

「サリーは、インド女性の衣装<sup>いしやう</sup>だが」

エレナ、目を閉じるとき



「インド、インドですか？」

「なんだ、そんなことも知らんのか」

モミアゲオヤジは想像通りの陰気臭い爺さんで、僕はひとつだけ言おうとしたことを切り出すのにも、ずいぶん時間がかかっていた。

「あの……、そのポスター、もらえませんか？」

「これか？」

オヤジは僕を一瞬にらみつけ、机の上の書類を整理してから、ふたたびじっと僕の身なりを見た。

「あんた、学生？」

「いえ」

「じゃあ何？」

「アルバイトです」

「ああ、無職むしょくね。あんた、インドに行ったことがあるか？」

「いいえ、ありませんけど……」

すると、モミアゲオヤジはこの時ようやく手を休め、はじめて僕に目を合わせてこう言った。

「だったら、行ってきたらいい。インドへ」

オヤジの額ひたいには、人生で苦勞した数だけのような太いシワが何本もたたみ込まれてあつた。

「しかしだな……」

このポスターは、旅行代理店が制作せいさくしたもので、自分も気に入っているから、お前などにあげるつもりはまるでない、とオヤジは言うところから勝手に話を進めた。

「目的めくや志しがなくてもいいんだ。インドへ行け。若いうちから急いでそんな

もの持ったってしょうがない。自由に外国へ行けるなんて、人類史上なかつた。十万年たって初めてやってきた時代の特典を存分に味わえ。ただし、若い頃にちよつとばかり世界を見たくらいで何かを悟つたような者には絶対になるな」

強引で説教臭い言葉だった。けれど、見事に僕の心のすき間をついてきた。「インドに行つて、何すればいいんですか？」

「わしに聞くな。何もしなくたっていいんだ。なんなら、このサリーの女さがせばいい。明日、パスポートを持つてきなさい。ビザとチケットの手配をしてやるから、十二万円、持つてこい」

「あの、僕、パスポート持つてないんですけど……」

「だつたら、すぐ戸籍謄本と住民票をとつてくるんだな。それから旅券事務所。わかつたか？」

「はあ？」

それから僕は、何も考えずにパスポートを取り、ふたたび柳川観光社へ行った。面倒な手続きは、すべてオヤジがやってくれた。半月後、柳川観光社の前を通ると、オヤジが飛び出してきて僕にチケットをくれた。ペラペラの紙に、呪文じゅもんのようなヒンディー文字が並んでいた。

出発当日、エアインディアの航空機に乗り込んでも、僕は本当にインドへ行くのか、もしかしてウソじゃないかと思っていた。外国へ行くなんて、まったく実感じっかんがない。もう今夜にはインドに立っているなんて想像できなかった。でも僕が、田舎を飛び出したときと同じ興奮こうふんを感じていたことは間違まちがいなかった。

この国はどうかしている。

安宿さがしと三食の飯にありつくだけで一日が終わってしまう。遺跡見物にでかける余裕すらない。何日たってもインドという国のパワーに負け続けている。僕はポスターの女性をさがすことなどすっかり放棄していた。あれほどの美貌を持った女性なら、いくらでも街を歩いている。もうどうでもよくなっていた。

そうして三週間後、僕は日本人に金をたかっていた。

毎日、物乞いのように手をさしだしている。プライドを捨てる必要はな

かった。そんなものは、初めから持ち合わせていなかったのだろう。ついには物乞いものこの子どもにまで恵めぐんでもらうことになったのだが、でもあの少女の金は受け取っていない。いくら僕でも、それだけではできなかった。僕が冷たくあしらうと、少女はこちらを見つめながら札をひろって、最後まで何か言いたそうな顔をして去っていった。僕は何事もなかったようにふたたび街を歩きまわり、夜になると駅で眠った。

それが翌日、同じ場所で、またあの少女に出会うことになる。

昼下がり、僕は街に立っていた。視線しせんを感じてふりかえると、壁の向こうから、少女が半分だけ顔を出してこちらをうかがっていた。僕が微笑ほほえみかえすと、すこし安心したのか、一步一步と近よってくる。インド人は一様いちように目が大きいけれど、この少女は特別、あめ玉のように大きかった。手足は

細いが、ふつくらした丸顔で、赤ん坊のまま大きくなったような子どもだった。少女は話しかけるでも観察するでもなく、二、三メートル離れたところから僕を見ている。

僕は手帳の空いたページに、少女の似顔絵を描くことにした。「じつとじていて」と手ぶりで伝えたのだが、少女は僕が何をやっているのか気になったようで、だんだん近づいてきてはこちらを覗のぞこうとする。

出来上がりをわたすと、少女はやつと小さく微笑ほほえんで、じつくり眺ながめた後、紙を僕に返そうとしてきた。「君にあげる」と伝えたのだが、それでも返そうとする。しきりに僕を指差しているから、もしやと思い自分の名前を書いてみた。少女は読めないはずの漢字四文字を見ると、顔いっぱいに笑みを浮かべて紙をポケットに入れた。

僕はこの少女と妙みょうに気が合ってしまって、食べ物分け合ったり、紙に

落書きしたり、陽がくれるまでいっしょにいた。

けれど、辺りが暗くなって屋台に明かりがとまり始めた頃、少女は手の裏を返すように泣きそうな目をして、一步一步僕から離れ、三度ほどぶりかえってから去った。そのとき、昨日とまったく同じ、何かにおびえたような、どこまでも暗い目を見せたのだった。昨日は僕が金を受け取らなかつたからだと思っていたが、今日の目も、昨日とまったく同じ、この世のあらゆる興味をうしなつたような、絶望的な目だった。

毎夜、僕は駅の構内こうないで多くのインド人に混じつて寝泊まりねどまりする。その夜も一角いっかくに場所をとり、荷物をまくらにして横になつていた。

「ワッツ、プロブレム？」

調子の良さそうなインド人青年が話しかけてきた。インド訛りの英語だ

が、僕にはその方が通じやすく、二つ三つ言葉をかわした。

彼はヤダンという名の大学生で、陸上選手として何度か日本に来たことがあるという。調子良く話しかけてくる者はたいてい下心したころがあるか詐欺師さぎしだが、ヤダンはどちらでもないようだった。彼の調子の良さはただの性格で、所持金を盗ぬすまれたことを話すと、「私は日本人に恩おんがある。YOUの力になろう」と言ってきた。

ヤダンはリキシヤをつかまえてから、いっしょに来いという。

「どこへ行く？」

「ノープロブレム。私に任せておけ」

ペダルを漕こぐリキシヤ夫の背中を見ながら、夜の道を通りぬけた。にぎわっていた街も静かになって、あちこちで人が布にくるまって寝ている。

降りたところは、何の特徴もない通りだったが、あたり一帯にただよう

数種類の匂いが、いやでも気になった。そのどの匂いも、まともなものではなかった。

商店や床屋やレストランもあるが、少し歩いて、ここはちよつとした売春宿だとわかった。建物の入口や二階のベランダには、原色の服をまとつた女たちがたむろしている。

「女はいらない、NO、NO」

僕は力いっぱいことわに断つたが、ヤダンはその遠慮えんりよと思つたのか、どんどん先に進んでいく。視線しせんを送ってくる女たちは、みな毒々どくどくしい化粧けしょうでお面のような顔だった。

「NO！ NO！」

僕が怒おこって帰ろうとしたら、ヤダンは僕の肩をたたいてから軽く笑つた。

「ソーリー、YOUをおどろかそうとしただけだ。この先に私のアパートメ

ントがある。私の部屋へ行こう

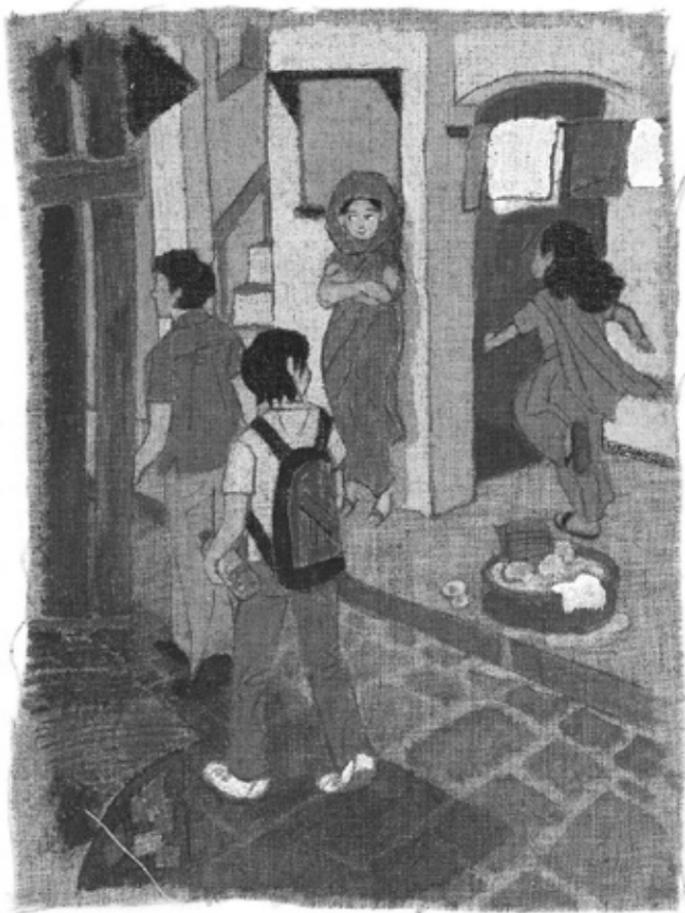
そんな時、こんなところで、一人の女と目が合ったのは何の因果だろう。ただし、偶然ではなかった。その女は、桶おけに手を入れて洗濯せんたくをしていたが、僕を見るとおどろいてすぐに奥へ引っ込んだ。一瞬だったが、僕にはあの物乞ものこいの少女に見えた。ピンクの衣装いしょうで、化粧をして、飾りをつけて、見てください。ことごとく変わっていたが、あのあめ玉のような目は間違いなく、今日会った少女だった。

あの子は、娼婦しょうふだったのか。

そんなこと、あつていいの。さらに、いまは身体みづちやくに密着みつやくした服を着ていたから知れたのだが、胸むねのふくらみといい、腰こしつきといい、おさない顔だけをすげかえたように、少女は完璧かんぺきな女の身体みづちやくをしていた。

まだ初潮しゅちゆうもむかえていない歳ごろだと思っていたが、あの少女、いった

エレナ、目を閉じるとき



い何歳なのか。別人だと何度もうたがったが、彼女もたしかに僕を見て反応したのだ。それに、あの大きな目を見間違えるはずがない。

ヤダンの部屋に入ってすぐだった。

「本当のことを話す。じつは、昨日から、YOUの姿を見ていた。YOUの女が、あのストリートにいると教えてやろうとした」

僕は、返答にまよった。

「ちがう、……いや、そうだ。昼間、街で出会った子だ。十二、三歳ぐらいだと思っていた。でも、大人なのか？」

「YOUの女は、たしかに少女だ。この国には、若い娼婦しょうふがたくさんいる。若い女にはホルモン注射をうって、ボディアップさせる。いずれ、デリーか、ムンバイへ売られるだろう」

「あんな子どもが、どうして娼婦しょうふになったんだ？」

「誘拐ゆうかいされたか、おそらく売られてきたのだろう。貧しい村から、借金まづのかわりに。女は若ければ若いほど値が高い」

「売られた？」

「そうだ。YOUの国とはちがう」

「でも、なぜ逃げようとしらない？」

「見張みはられている。逃げたとしても行くところがない。だから、あるていど、昼間は外に出ることもできる」

帰り際に見せた少女のよんだ目が、浮かんでは消えた。

「あの子は、どうすれば自由になる？」

「簡単だ。借金の分だけ払えばいい」

「いくらだ？」

「さあ……。だが、ジャパニーには、そう高い金ではないだろう」

ヤダンは首をかしげたが、その疑問は僕に対するものだった。

「YOUは、あの少女を買う気か？」

「そうだ。買って、自由にする」

僕は、自分が言ったことに自分でおどろいた。いや、でもこれは間違まちがいな  
く僕の意志いしだ。いま思いついたことだが、ずっと以前から考えていたことの  
ようにさえ思えた。僕はあの少女を自由にしようと思っていた。

「女と関わり合うのはやめておけ。こんなところで無駄むだ金かねを使うな」

「ああ、わかっている。だが、もう決めた後だ」

僕はあの少女を買い取る。買い取って自由にする。そのために、いままで  
貯たくわめた金のほとんどを投げ出すことになるだろうが、おそらく僕はそうなっ  
たとしても、少女の見受みうけに金を出さだろう。もともと人からたかった金で  
はないか。少女が僕に一ルピー札たの束たばをくれようとしたように、僕も少女に

金を出す、それだけのことだ。

「待て。Y O Uは日本人だが、余分なマナーを持たない。国に帰れなくなる。それなのに、なぜそんなことをする」

「いいから、するんだ」

「Y O Uはクレイジーだ」

「ああ、僕はクレイジーだ。少女を買いに行く。すまないが協力してくれないか？ 通訳をたのみたい」

「わかった、おちつけ。でも、もうおそい。今夜はここで寝ろ。すべては明日だ」

「わかった。明日だ」

この決断に、裏も表もなかった。僕は「なぜ」とか「何のために」とかいふ理由もなく、少女の身受けに金を出すことを決めていた。

それでも、もし何か理由があるとすれば、それは、なにも良いことがな

かった旅の終わりに、何かできないだろうかと思ったのだと思う。それとも、僕の中にあつたかすかな情じじょうが、ふくらんでいたのか。

4

朝、この界限かいわいは、夜とはまた別の異様いようさがあつた。昨日手まねきしていた女たちが、逆に僕らをさけて歩いていく。

シャツを着くずした女が、ヘラヘラ笑いながらこちらに向かつてきた。突然自分のシャツをずり下ろすと、たるんだ胸を僕にすり寄せてきた。僕が身を引くと、すぐに叫び声をあげて去っていった。あのような女はこの辺にいくらでもいる、とヤダンと言った。

「この建物か？」

「ああ、たしかにここだ」

まずヤダンが客のふりをして売春宿ばいしゅんやどに入っ  
ていった。僕は、しばらく外で待  
つてから、ヤダンに呼ばれて中に入  
った。とうに陽はのぼっていたが、  
建物の中は真つ暗に近かった。

小太りの男がいた。ヤダンがす  
でに話を切り出しており、金額の  
交渉に入っていた。

「いくらって言ってる？」

「アズユーライクお好きなようにと言っている」

「なめられてるってことだな」

僕はポケットのあり金をつかんで、男の  
前に置いた。小太りの男は、ま  
つたく話にならないという顔をして  
視線しせんをそらした。

ヤダンは「まだ金を出さな」と小  
声で言った。たしかに、このま  
までは相手のペースに乗せられて  
しまう。

ヤダンは改めて交渉こうしょうをはじめた。うまく男をおだて、そうかと思えば怒って壁をたたき、わざと帰るふりをした三十分後、やっと金額が一致いっちした。僕が持っていた額では数百ルピー足りたりなかったが、それはヤダンが負担ふたんしてくれた。

「日本に帰ってから金を送ってくれ。それでいい」

と、ヤダンは言った。

男は札さつをかぞえながら、ニヤリと笑って何か言った。

「まだ足りないのかって？」

「カメラをよこせと言っている。ジャパニーなら持っているだろうと」

「ああ、持っているぞ」

僕はザツクの中からカメラを出し、男の前にたたき付けた。男はニンマリ笑えみを浮かべると、奥に向かつて何とかと叫ぶ。

しばらくして、真つ暗な階段からそつと降りてくる足が見えた。大きな目をした少女が、表情のない人形のような顔で僕の前にあらわれた。

「OK、OK」

小太りの男は、どこへでも行けと手首をふった。ホツと安心しながらも、こんな簡単に人が買えたことを、僕はまだ理解できないでいた。

少女を外につれ出して、ヤダンになりゆきを説明してもらったが、彼女はまるで自分のことではないように、突つ立ったまま何もしゃべらなかつた。今度は僕に買われただけと思つたのだろうか、すでに希望というものを失つていたのか、おびえることもなく、喜ぶこともなく、徹底して表情がないのだった。

とにかく君は自由の身になった、僕は君をどうするつもりもないと念押ねんおして、それを証明しょうめいするためにも僕はすぐに立ち去ることにした。

「ヤダン、僕はもう帰る。そう伝えてくれ。世話になった。金は必ず返す」

「OK、グッドラック」

僕は南へ歩いていった。そのときだった。

少女は、僕の右腕をつかんだ。彼女の精いっぱいあぐりよくの握力が、僕の右腕に伝わった。乱れた前髪の奥に見える大きな目は、黒くにじんでいた。涙で化粧けしょうが落ちたのだった。

少女は、明らかにひとつのことを訴うたえている。一文無しで放り出されても、この先どうにもならない、私もつれて行ってほしい……、そう僕には聞かされた。

僕はこの少女を故郷こきょうへ送り届けようと決めた。これも、少女を買い取ると決めたときと同じく、意味はなかった。僕は拾ひろい食くいもしたし、物乞ものこい同然どうぜんのこともした。墮おちた旅行者だ。こうなれば、とことん墮おちてしまっ

でもかまわない。墮ち行く先はどこなのか、そこはどんなところなのか、たしかめてみるのも良いかもしれない。僕は単純にそんなことを考えていた。

「YOU、これからどうする気だ？」

ヤダンがたずねてきた。

「この子を故郷こきょうに送る。たしか昨日、母親がいると聞いた」

「そうか」

「ヤダン、君には世話になった。ありがとう」

「ノープロブレム、やはりYOUは、クレイジーだ」

ヤダンは、ポケットからぬき取った百ルピー札を僕の手においた。僕は何も言わずに受け取ることにした。その金が僕の所持金のすべてだった。

ヤダンにもらった金で、少女に上下の服を買った。少女は着替えてから水

道でジャブジャブと顔を洗って、髪をととのえてから僕を見上げた。化粧けしやうを落としたと同時に、子どもに生まれ変わったようだった。

まだ子どもとはいえ、インド人女性と日本人の男が並んで歩くと、かなり目立つ。通行人はじっくり五秒間、僕らを眺めていく。たえず多くの視線しせんをあびたが、ただ、少女の方も気にしていなかったようだし、僕もそんな視線にはとうに慣なれていた。

駅に行つてから、地図を見せて「君の町は？」と聞いたが、そもそも少女は文字が読めないようで、ずっと地名らしい言葉をくりかえすだけだった。

金をわたすと、少女は何人にも聞いて回つてから切符を買ってきた。二枚買ってきたのだから、やはり僕について来いというのだろう。どこまで行くのかわからないが、切符の値段から考えて、それほど遠いところではなく、半日もあれば着く町のようなのだ。そこから少女の家まで、歩いて行けるのか、

リキシヤか、バスか、それはまったくわからない。

少女が買ってきた二等切符は、日本とくらべれば信じられないほど格安だが、それでもきれいに財布の中のルピー札がなくなっていた。これでの所持金は、ポケットにあつたよれよれの紙幣が何枚かと小銭だけになつた。これからは、時計やライター、ザックの中の持ち物を順に売ることになるだろう。

改札口からホームに入った。

駅は、いつ来ても混雑している。乗客たちはみな自分よりも大きな荷物をかかえて列車に乗り込んでいく。声をはりあげる売り子、トランク三つを頭に乗せて歩くポーター、行きかう人々、その真ん中で眠る男。

さつきからずつと、両足が付け根からない老男が「バクシーシ、バクシーシ」と僕に手のひらを突き出している。五十パイサコインをあげると、老

男は人差し指を額ひたいに当てて僕にいのりをささげ、手作りの車イスを引いて、去っていった。

列車を待ちながら、僕は少女と会話をこころみた。ヒンディー語の辞書じしょはずいぶん前に売りはらつていたので、旅行中に覚えたいくつかの単語たんごしか使えない。会話というよりは、ほとんどジェスチャーゲームだった。僕は自分をさして「ヒロキ、ヒロキ」とくりかえし、名前を教えようとした。次は君の番とばかりに指さすと、少女は何か言い返したが、複雑ふくざつで聞き取れない発音はつおんであつたうえに、それが名前かどうかもはっきりしなかつた。だが、その音の中に「エレナ」と聞こえるものがあつた。まるでインド人らしくない、どちらかといえはヨーロッパ人の名で、僕の聞き間違まちがいだとも思ったが、僕は「エレナ」という響ひびきが気に入つてしまつて、この少女を自分の中だけでエレナと呼ぶことにした。

「…ヒロキヒロキ」

今度はエレナが僕の名前を呼んだ。エレナの中では、二回くり返した僕の名前が一つの単語となっているようだった。

「…ヒロキヒロキ、…ヒロキヒロキ」

こう言えば僕が喜ぶことを心得たようで、僕の名前をくり返すと、口を閉じたまま小さく笑った。エレナはあまり笑う子ではなかったが、まれに微笑んだときの表情は、僕の胸をじかに刺激した。僕の何倍もつらく苦しい経験をしてきただろうこの子は、いま、僕のために微笑んだのである。

横殴りの雨がふってきた。ホームの屋台が動きだす。さらにはげしい雨になって、どんどん空が暗くなる。雷も落ちる。辺りが暗いせいで空一面が金色に光った。今頃、ベナレスの街は水びたしだろう。僕が過こした界限も、

すぐにひざまでつかるだろう。

列車が入ってくると、ホームに寝転んでいた人たちがムクムクと起き上がってひとかたまりになった。降りる乗客など無視して、列車が止まらないうちに飛び乗っていく。僕らも流れにまかせて乗り込んだが、すでに車内は人、荷物、体臭でむせ返っており、僕らが入るすき間はどこにもなかった。僕らはデッキにあふれる乗客の中で肩をよせてすわった。

二等車では荷台が一番の特等席のようで、少年二人が横になっている。手前の座席には総勢七名の家族がいて、母親が二才くらいの子どもに車内で小便をさせている。

発車直前に、大きなビニール袋を担いだ夫婦が乗り込んできた。とうに空席はないからデッキにすわり、ビニール袋から何を取り出すのかと思えば、赤ん坊が顔を出した。ビニールは雨よけだったのだ。母親は愛情を込めて

その子を抱くと、まもなく赤ん坊が身を大きくそらせてゴボゴボと咳をした。母親はまるで自分が咳をさせたかのように悲しみを浮かべ、なおも強く抱きしめると、赤ん坊はゴボゴボと咳をしなから、母を見上げて微笑んだ。ほどなく列車は走り出す。

落ち着いてから、僕は連結部のすき間に移動した。アコーディオンの布がやぶれており、そこから外の景色がよく見えた。破滅的なガタゴト音が身体に響く。外を見ればけっこうはやい急行列車だとわかる。

ベナレスの街を抜けると、すぐ田舎に入った。草原にポツンポツンと点を打ったようにドーム状の大きな木があつて、レンガ建ての家、牛の行列と、どこまでも似たような景色が続く。芝居で使う背景画のように、巻きもどしてまた同じ絵を見せられているようだった。僕はそれを、いつになったら見飽きるのだろうと思いつながら、ただボーっと眺めていた。

ふと、エレナはどうしているかと思つて戻つた。エレナはまるでベンチにでも座るように開けっぱなしの扉から足を投げ出していた。小さな身体がいまにも飛ばされそうで、僕は「あぶない、あぶない」とさげんだが、エレナは相変わらずランランと足をふつて気持ち良さそうに風をあびていた。外から飛び込んでくる強風に、エレナの長い髪が水平すいへいになびいていた。手をのばせばすぐ外の世界がある。エレナは故郷こきやうに帰ることができると喜びを全身であびているようだった。

僕は近よってきたサングラスの男に、セイコーの腕時計を五百ルピーで売つた。これでしばらくは金の心配が消えたせいか、僕は眠くなつてきてデッキの壁にもたれ、じきに寝入つた。

目を覚ますと、雨は上がつていた。

エレナは「ヒロキヒロキ」と僕の名前を呼んで、右と左のひとさし指を十字に重ねるおまじないをした。

寝ぼけ眼で空を見上げて、空に何か浮かんでいると思ったら、夕陽だった。どんよりナマリ色だった空が、絵の具で塗ったようなオレンジ色になっている。

雲ひとつない空に、バカでかい太陽が原野の地平線に沈もうとしていた。僕は目の前の景色に圧倒されていた。エレナも黄金色の太陽に見とれていた。いま、僕の視界には、地面と空と太陽と、エレナしかなかった。

エレナ、目を閉じるとき

